

日本人のアイデンティティ ——排他性と国際化——

04K036 齊木 章子

はじめに

当初国籍とアイデンティティの関係について、いくつかケースを挙げ考えようと思っていたのだが、いろいろな本を読んでいると日本の排他性が目に付いた。日本人というアイデンティティの確立、同化政策を行った台湾統治、日本人のアイデンティティが確立することにより、民族問題への感受性がほとんど完璧に奪い去られてしまった現代を追い、日本の真の国際化について考える。

1. 日本人のアイデンティティ

「日本人のアイデンティティ」というと、よく「島国根性」と挙げられることがある。日本は多民族国家だが、単一民族国家としての意識が未だに根強い。四方を海に囲まれれば、陸続きとは違い異種の者は入って来にくいだろう。同種の者だけの閉鎖された世界で生まれ、作り上げられる文化、価値観などもあるだろう。しかしそれを本当に「島国だから」という理由だけに帰してよいものだろうか。

『日本人と多文化主義』の中で網野善彦はそれらを「直ちに『島国』という自然条件と結びつけ、あたかも日本人全体の特質、『民族』的な心性であるかの如く強調するのは、余りにも安易で非学問的な議論⁽¹⁾」と述べる。

網野によると日本列島は大陸の南北、東南アジア、ポリネシアの島々にいたる架け橋として、海を通じ人々の出入りがきわめて活発であったという。稲作や多彩な技術・文化も大陸からもたらされた⁽²⁾。また同書で山内昌之は安土桃山時代にも大勢の宣教師が来、奈良朝・奈良朝以前にも帰化人・渡来人の存在があり、実際我々の社会の中でごく普通に彼らと共存していたという⁽³⁾。

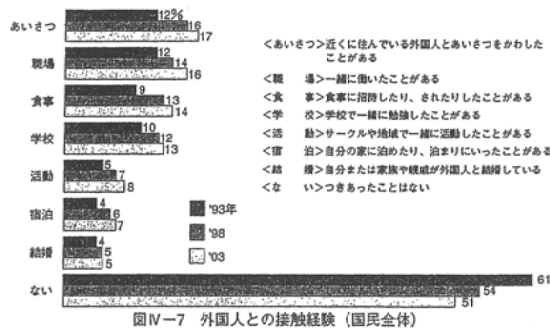
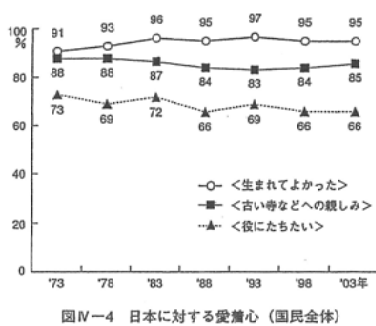
そういった意味では昔の日本は多文化主義だったのであり、現代のように単一文化主義（と錯覚するよう）になったのは近代以降である。同書で田中宏は以下のように述べる⁽⁴⁾。

明治以降、ある種の近代化の中で、国民国家という形で非常にタイト（硬質）な社会をつくるのが社会の発展であると、かなり無前提に信じきって国をつくってきたという感じを持ちます。求心力のある社会をつくっていくことになると、ある種の排他主義をおのずと身につけてくる。そこで外国人とのまみえ方も自己中心的になってきて、自己の発展を至上のものとしていく。

近代以降の日本は国民国家を目指し異質な者を排除し、「高度な」教育によって国民統合をはかってきた。

標準語での授業や、共通の「日本的な意識」（着物、富士山など）を国民に持たせることに成功した。「日本人のアイデンティティ」とは、近代化の産物であり、他を排除することによって作り上げられてきた「優越意識」であるとする。それが今日に至るまで綿々と私たちの体の一部として刷り込まれているのである。

ここに2つのグラフがある。NHK 放送文化研究所が全国の16歳以上の国民を対象に、1973年から5年に一度行っている「日本人の意識」調査である。左は「日本に対する愛着心」、右は「外国人との接触経験」についてのグラフである⁽⁵⁾。



『現代日本人の意識構造 第六版』

愛着心の調査は「日本に生まれてよかった」、「日本の古い寺や民家を見ると、非常に親しみを感じる」（伝統文化についてどのように感じているかを尋ねたもの）、「自分なりに日本のために役にたきたい」という質問について「そう思う」と回答した人の割合の推移を国民全体についてみたもの、外国人との接触経験調査は93年から開始されたもので、上にある項目について当てはまるものがあればいくつでも回答可というものである。

私はこの2つのグラフは比例していると考え。そして近代以降続く日本至上主義と排他性が如実に表れていると考える。

2. 排他という名の同化

日本は1895年～1945年までの50年間台湾を植民地としていた。本来異質なものは排除というのが日本人の考え方だが、清国から譲渡された台湾はすでに「日本」である。統治するにあたり内地での制度、法律、風俗習慣などを植民地に延長・適用する「内地延長主義」に基づくゆるやかな同化政策がとられ、段階的に強化されていった⁽⁶⁾。

同化というものに言語や文化は真っ先に利用されるものである。映画『非情城市』にも日本語、床の間、日本式書道など随所で日本的なものが見受けられる。

しかしそれによって同化教育を受けた台湾人が本当の意味で日本人になれるだろうか。確かに当時台湾は日本だが、日本と台湾をつなげているのは支配-被支配という関係であり、そこに対等な立場というものは存在

しない。内地で生まれ、内地で生活する日本人こそが「日本人」なのであって、他を排し、自らを最上の者とする優越意識はここでも変わらない。

統治時代後半になると戦時体制の下「皇民化」が推進され、改姓名などが行われる。「天皇の赤子」、「日本人」として戦地に送られた20万7,183人の台湾人に対して「日本国籍を喪失した」ことを理由に、日本人と同様の「つぐない」がない問題もある⁽⁷⁾。

日本は台湾統治時代、いわば「排他という名の同化」を行ってきた。日本人というアイデンティティの確立、それを台湾人にも植え付けようとする反面、本当の意味で自分たちと同じだとは決して認めないという二重の意識構造が生まれる。戦後台湾が日本ではなくなると「異質なものは排除」＝無関係という立場をとり、現在に至っている。当時の遺産として今もこのような賠償問題が残っている。

3. 民族問題に鈍感な日本人

「日本国民は日本人」。多くの日本人が疑いもなくそう思っているだろう。そして国籍も日本だと。しかし日本には日本人以外の人間もいる。そして無国籍という人間も存在するのである。法務省の外務団体の統計によれば2003年現在、日本に無国籍の人間は1,846人いる。登録されてない人や、本人の自覚なく「無国籍化している人」は、この数をはるかに上回るという⁽⁸⁾。

ここに一冊の本がある。陳天璽著『無国籍』である。陳は30年間無国籍として生きてきた。複雑なアイデンティティと向き合ってきた人間の一人である。大陸出身、国共内戦の末台湾に移住し、その後日本に移住した両親の下で陳は1971年横浜の中華街で生まれ育つ。

日中国交正常化の際、中華民国の国籍を持っていた陳家は全員「無国籍」という選択を選んだ。父は1961年に国連難民高等弁務官事務所が制定した「無国籍の減少に関する条約」を知り、国が守ってくれなくとも、国際機関が守ってくれるだろうと考えたのである。陳はまだ1歳であった。

陳は自分の祖国は台湾だと思っていたが、(両親に中国人として生きるよう教育されていたこと、台湾のパスポートにあたる「中華民国護照」を持っていたことによる)台湾に行った時、「無国籍」と書いた入国カードを提出すると管理官に中華民国と書き直すよう命じられたこと、日本の生活になじめないことなどから無国籍の意味、国籍とアイデンティティについて深く悩むようになる。そして華僑・華人、移民や国籍問題に取り組むことをライフワークとする決意をする。現在国立民族学博物館助教授を務めている。

読み進めていくと、帰化する際法務局に行った時の職員の傲慢な態度や、陳が高校生だった時の日本人のクラスメイトの無邪気なゆえに傷つける発言など、日本にはまだ「他を受け入れる」という態勢ができていないと痛感した。グローバル化が進む中で、これからどんどん外国人は日本に入ってくるだろう。労働力などよばざるを得ない状況もある。世界には多民族、多文化が国家の中に存在し、それが統合の妨げになっている国の方が多いのである。日本でお近代化の中でこうした問題に対する感受性が奪い去られてしまった。民族問題は外国の話ではないのである。

さらに付属のプリント「私はいったい何者か」を見て頂きたい⁽⁹⁾。王崧興の自分の名前についてのコラムである。最後の「どこに行ったのか、東シナ海の上空で迷っているのかもしれない」という言葉はあまりに巧すぎる。この言葉は様々な言語環境の中で育ってきた台湾人の複雑なアイデンティティを表すと同時に、日本が

民族問題に対してどれだけ鈍感かという皮肉が込められている。

パスポートのローマ字表記はヘボン式ローマ字に則っている。前掲書の陳も日本のパスポートを取得する際「CHINTENJI」にするよう言われたが、非ヘボン式の本来の音「CHEN TIEN-SHI」が認められた⁽¹⁰⁾。ちなみに東京都ホームページのパスポートのサイトを開いてみたら、平成12年4月1日からパスポートの新規申請に際して、氏名に「オウ」又は「オオ」の長音が含まれる場合、「O」か「OH」のいずれかの表記を選択することができるようになったという⁽¹¹⁾。

おわりに

日本人のアイデンティティというものが確立される。それは日本人に対する自信を与えると同時に、民族問題に対して鈍感な日本人も作り上げてしまった。「単一民族国家」として過ごしてきた日本が、これからどうやって多くの外国人と共存していくのかも、さらにこの場合、台湾に対し行ったような同化による共存ではなく、それぞれの違いを尊重した上で共存していくことは可能なのかも。まずは私たち一人一人が自分の問題として考える必要がある。

今回このようなテーマを選んだのは、関係書物を読んでいるうちに私自身のアイデンティティが揺らいできたからである。私は自分の思うところがアイデンティティだと考えている。その上で私は日本人としてのアイデンティティも持っていた。しかしそれが他を排することで生まれたアイデンティティなら、私が今まで感じてきたものは虚構だったのではないかと。

これに対する自分自身で探した答えは、国だけに自分のアイデンティティの重きを置く必要はないということ、そして従来の日本人の偏ったアイデンティティではなく、他を受け入れられる許容の広さも持つということである。私だけでなく多くの日本人がこうなった時に、日本は真の国際化を遂げられると考える。

註

- (1) 石井米雄・山内昌之編『日本人と多文化主義』、山川出版社、1999、p4
- (2) 同上、p5
- (3) 同上、p.183-84
- (4) 同上、p.184
- (5) NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識調査 第六版』、日本放送出版協会、2004、p.121、124
- (6) 笠原政治・植野弘子編『暮らしがわかるアジア読本 台湾』、河出書房新社、1995、p.264
- (7) 同上、p.268
- (8) 陳天璽『無国籍』、新潮社、2005、p.12
- (9) 笠原・植野、前掲書、p.19
- (10) 陳、前掲書、p.216-219
- (11) 東京都ホームページ、パスポート、ヘボン式ローマ字綴り方表
<http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/hebon/>

参考文献

坂井亨『台湾入門』、日中出版、2001

青木保『日本文化論の変容 戦後日本の文化とアイデンティティ』、中央公論社、1990

浅井信雄『最新版 民族世界地図』、新潮社、2002

(レポート指導教員 松本 ますみ)